



鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター

令和5年度 地域マネジメント 教育研究プロジェクト 報告書



令和5年度
「地域マネジメント教育研究プロジェクト」
報告書

目次

巻頭言

| | |
|-----------------------|---|
| 鹿児島大学法文学部長 藤内哲也 | 2 |
|-----------------------|---|

活動報告

| | |
|---|----|
| 1.地域の特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み | |
| ・ 地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト | 4 |
| ・ 近現代における奄美島唄の伝承の研究及び歴史的録音のデジタル化 | 7 |
| ・ 「場」の形成から始まる現代文化創出 | 11 |
| 2.本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元 | |
| ・ 近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究 | 14 |
| ・ 戦前・戦中期の鹿児島における女子教育に関する研究 | 16 |
| ・ 肝属川の水利をめぐる民俗知と川－人関係に関する調査研究 | 19 |
| ・ 薩摩焼のための新しい素材の探究 | 23 |
| 3.地域的課題把握とその解決に向けた取組み | |
| ・ 地域課題としての水俣病を通じた普遍的課題の異分野間共有と記録の継承 | 27 |
| ・ 地域文化資源としての本場大島紬織物産業の持続可能性に関する調査研究 | 31 |
| ・ 沖永良部島の資源および経済の持続的好循環構築に向けた文理融合型プロジェクト | 34 |
| 4.教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進 | |
| ・ 指宿の地域資源の探究2：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業 | 38 |
| ・ 旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト | 41 |
| ・ 「種子島研究」の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用 | 44 |

地域マネジメントプロジェクトの Relation 2023－2024

| | |
|---|----|
| 「鹿児島の近現代」教育研究センター 地域マネジメント担当 日高優介 | 47 |
|---|----|

令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト事業を終えて

| | |
|-------------------------------|----|
| 「鹿児島の近現代」教育研究センター長 丹羽謙治 | 48 |
|-------------------------------|----|

巻頭言

法文学部長 藤内哲也

幕末維新期に始まる日本の近代化において、鹿児島がその拠点の一つであり、西郷隆盛や大久保利通に代表される薩摩藩出身者が中心的な役割を担ったことはよく知られています。しかしながら、明治以降の政治や経済の動向、新しい制度や文化の形成、そしてそれらの領域における鹿児島出身者の活躍については、東京を中心に語られるのが常であり、同時代の鹿児島についてはこれまであまり注目されてきませんでした。では、その鹿児島において「近代」という時代が何をもたらし、地域社会をどのように変え、この「現代」へとつながっているのか——こうした「鹿児島の近現代」に正面から向き合い、その政治や経済、社会、文化に関する諸課題に取り組むために、鹿児島大学法文学部では**2022**（令和**4**）年**10**月**1**日に「鹿児島の近現代」教育研究センターを設立し、さまざまな取り組みを行っています。

本センターの活動の大きな柱の一つが、「地域マネジメント事業」です。この事業は、鹿児島が誇る豊かな自然環境や歴史的遺産、地域に根差した固有の文化や習俗を地域資源ととらえ、それらを教育や研究に活用するだけでなく、その成果を広く還元し、地域社会の活性化に資することを目的としています。そのため、法文学部の教員を中心として、学生や他部局の教員、地域の団体や住民のみなさまと連携する公募型の地域マネジメント・プロジェクトを実施してきました。

本センターの開設から**2**年目を迎えた**2023**（令和**5**）年度には、（1）新たな文化の創生につながる取り組み、（2）地域の歴史的・文化的資源の地域への還元に向けた取り組み、（3）地域課題の把握とその解決のための取り組み、（4）教育・地域マネジメント人材育成に係る取り組みの**4**分野において、あわせて**13**のプロジェクトが実現しました。本報告書は、その具体的な取り組みと成果についてまとめたものです。これらのプロジェクトが、多様な視点から「鹿児島の近現代」に切り込み、地域の抱える諸課題の解決と社会の発展をもたらす一歩となることを願っています。

鹿児島大学法文学部及び「鹿児島の近現代」教育研究センターでは、この地域マネジメント・プロジェクト事業を継続的に推進し、さらなる拡充を図ることで、地域社会の活性化に貢献したいと考えています。本センターの活動について、鹿児島大学の学生や教職員のみなさま、そして地域のみなさまのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

活動報告

1. 地域的特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み

鹿児島伝統工芸や伝統芸能とその継承に向けた研究。現代アートを軸とした地域の有形・無形の知財の発掘と活用など。

・ 地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト

太田純貴（法文学系）、菅野康太（法文学系）、農中至（法文学系）、酒井佑輔（法文学系）、清水香（教育学系）

・ 近現代における奄美島唄の伝承の研究及び歴史的録音のデジタル化

梁川英俊（法文学系）、アンニ（地域政策科学専攻博士後期課程学生）

・ 「場」の形成から始まる現代文化創出

菅野康太（法文学系）、酒井佑輔（法文学系）、太田純貴（法文学系）、農中至（法文学系）

地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト

プロジェクト参加教員

太田純貴（法文学部人文学科多元地域文化コース 准教授）

菅野康太（法文学部人文学科心理学コース 准教授）

酒井佑輔（法文学部法系社会学科地域社会コース 准教授）

清水香（教育学部美術科 准教授）

農中至（法文学部法系社会学科地域社会コース 准教授）

役割分担

太田（代表）：企画・司会・コメンテーター・資料収集・調査・研究の総括

菅野：企画・アドバイザー・コメンテーター

酒井：企画・アドバイザー・コメンテーター

農中：企画・アドバイザー・コメンテーター

清水：企画・アドバイザー・コメンテーター

助成額

495,070 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、アートおよびアート関係者の知見を軸に、地域とまちづくりを複数の視点から検討すること、鹿児島的人的・知的財産を発掘すること、そうした財産を活用する知見を獲得することである。本プロジェクトは、地域の人的・文化的資源や関連する歴史を多角的に掘り起こし、将来地域を文化的に発展させる可能性を孕む要素への目配りとなる。それを学生や地域の人々が参加可能な場で共有することは、地域を支える人材の育成につながる。別言すれば、本プロジェクトの目的は複数の水準で地域の文化を下支えしていくインフラとなることである。

以上を踏まえて、本プロジェクトの主目的として以下の二点を設定した。

1. 現代アートを中心に、アートやまちづくりに関して鹿児島や近隣地域に根ざしながら堅実に向き合ってきた関係者の活動を掘り起こす。
2. 鹿児島における現代アート関係の活動の射程や可能性を検証する。そのために、県内外の状況との比較を行う。比較のための対象として、国内において現代アートを専門的に扱う熊本市立現代美術館の事例や取り組みを取り上げる。

具体的なプロジェクト内容

上記の目的を達成するため、2023年度は四つのワークショップを開催した。

〈ワークショップ1：まちづくり従事者×広報担当者×秋田市文化創造館館長〉

2023年10月27日（金）に、鹿児島県を中心にまちづくりや広報に関わってこられた四元朝子氏（サンカイ・プロダクション合同会社 代表）、市村良平氏（株式会社スタジオグッドフラット代表取締役）と、藤浩志氏（美術家・秋田公立美術大学教授、）をお呼びし、アートと地域とまちづくりの関係を、鹿児島と秋田などでの事例をもとに検討するワークショップを開催した。

〈ワークショップ2：霧島アートの森学芸員×都城市立美術館学芸員〉

2023年11月17日（金）に、祝迫眞澄氏（都城市立美術館）と宮藺広幸氏（霧島アートの森学芸課長）をお呼びし、地域の文化を担う文化装置としての美術館や、美術館を軸とした地域の文化的交流の実情を、実際の例を通して伺い、参加者全体で議論をするワークショップを開催した。

〈ワークショップ3：NPO 法人代表×熊本市立現代美術館学芸員〉

2023年12月1日（金）に、鹿児島でNPO法人（P and A）の代表を務め鹿児島文化情報センター（KCIC）のメンバーでもあった早川由美子氏と、坂本顕子氏（熊本市立現代美術館）をお呼びし、アートと地域・まちづくり・教育との関わりについて話題を提供していただき、参加者全体で議論をするワークショップを開催した。

〈ワークショップ4：インディペンデント・キュレーター×美術作家×本学教員〉

2024年2月8日（木）に、ともに鹿児島在住のインディペンデント・キュレーターである原田真紀氏と美術作家の木浦奈津子氏と太田の3名により、2023年10月から12月にかけて熊本市現代美術館で開催された〈遠距離現在〉展を論点とした、トークイベントを開催した。

プロジェクトの成果

プロジェクトの成果として特に、1.地域とアートの多様な関わり方の具体的事例に基づいた把握、2.アートに興味関心を持った場合の修学や就職に関する展望の獲得、3. 地域の課題に対する鹿児島大学法文学部の知見の有益性の発掘の三点が挙げられる。

藤氏や祝迫氏や宮藺氏や坂本氏、原田氏からの話題提供を通して、青森や秋田、鹿児島や熊本や宮崎といった地域で、アート関連のイベントや美術館が地域やまちづくりに貢献していることを参加者は具体的に知見を得る契機となった。また、市村氏や四元氏からの話題提供を通して、アートに関わることは決して制作や学芸員や教員といった立場に限定されるものではなく、広報活動やファシリテーターといった立場からも関わることが示された。それは、大学でアートに関係する内容を学んだ場合、それを活かす

ことのできる立場は、学芸員やアーティスト以外にも、複数あることを示唆しているだろう。

本プロジェクトは鹿児島大学法文学部における学術的知見の活用に関しても示唆的である。例えば、坂本氏からは熊本市現代美術館による「やさしい日本語」などへの取り組みの事例を提供いただいたが、日本語教育や社会教育に関する成果は、教育・研究の両方の水準で本学部の複数の教員が積み上げてきている。大学で積み上げられた成果は、理論的なモデルであったり特定の地域を念頭においたものであったりする場合があるので、各地域に一元的に応用可能というわけではない。それゆえ、地域の固有の文脈を絶えず睨みながらというのは大前提であるが、大学が築き上げた知財・人材が地域の課題解決に結びつき得ることが示されたように思われる。「やさしい日本語」以外にも、地域の映画館や映像文化についての美学芸術学的・メディア文化論的・人類学的知見なども、地域への応用可能性を秘めているだろう。

また、ワークショップ4は、後半の質疑や司会進行は学生3名（全て地域社会コース）が対応してくれた。学生による仕切りは教員の予想を超えるものであり、ゲストの選定などでサポートは必要だが、今後同様のイベントを開催する場合は、学生による主体的な仕切りの度合いをより高めても問題ないと思われた。

なお、上記の活動については活動記録を作成し、鹿児島の近現代センターに寄贈した。

〈プロジェクト成果物〉

展覧会カタログ、活動記録・資料等の寄贈（かわるあいだの美術実行委員会、霧島アートの森より）

太田純貴編『令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト事業「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」活動記録』（上記登壇者、参加学生による寄稿がされている）

学生によるイベント告知用のフライヤー



近現代における奄美島唄の伝承の研究及び歴史的録音のデジタル化

プロジェクト参加者

梁川英俊（多元地域文化コース教授）、アンニ（地域政策科学専攻博士後期課程学生）
役割分担：梁川＝調査・資料収集、研究の総括、アンニ＝調査・資料収集

助成額

50万円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの第一の目的は、近現代における奄美島唄の伝承というテーマについて、奄美群島と本土という二つの視点から調査研究を行うことである。今日奄美文化の表看板である島唄の伝承は、1960年代から伝統的な「シマ＝集落」の歌遊びではなく、レコード、カセットテープ、CD等の録音、島唄教室、ラジオ、ネット等が中心となっている。本プロジェクトでは、この変遷を歴史的資料に基づいて検証し、さらに島唄教室等を対象としたフィールドワークを行うことによってその現状を分析する。本研究の第二の目的は、島唄関係の歴史的録音を発掘し、保存することである。現在貴重な歴史的録音が残っているが、劣化がひどく、近い将来再生が困難になる。本プロジェクトではこれらの録音をデジタル化して保存し、アーカイブを構築することを目指す。今年対象としたのは、喜界島出身の在野の民謡研究家であった久保けんお（1921～1991、1960年南日本文化賞受賞者）が残した音源である。以上の目的は、「『鹿児島県の近現代』教育研究拠点整備事業」の主旨とも直結するものである。

プロジェクトの内容

本プロジェクトで実施した内容は、「本土と奄美群島における島唄教室の調査」と「民謡研究家・久保けんおの録音資料のデジタル化」の2項目に分かれる。以下、各々について説明する。

1) 本土と奄美群島における島唄教室の調査

当初は東京の島唄教室の調査を予定していたが、コロナやインフルエンザ等の影響で直接教室で練習に参加する希望は叶わなかった。代替手段として、梁川が2023年11月22日に唄者・前山真吾の招待で、東京都杉並区高円寺のライブハウス「座・高円寺2」の「前山真吾 AMAMIMSM リリース記念ライブ IN 東京」に参加した際に、終了後東京奄美三線会の関係者をはじめとする関東の島唄教室関係者数名にインタビューを行い、歌詞集や三味線譜等について具体的な情報を得た。

翌 2024 年 1 月 20～22 日には、梁川が奄美大島で調査を行った。特に 20 日には歌手・中孝介氏の母で唄者の中はずみ氏にインタビューを行い、はずみ氏の師である坪山豊や息子の中孝介氏に関する貴重な情報を得た。

2022 年 2 月 27～29 日には、梁川が奄美大島と喜界町で調査を行った。まず 27 日 11～15 時まで、奄美大島で島唄の歌詞に詠われる場所の調査および新民謡の歌碑について調査を行った。同日喜界島に渡り、夜はライブハウス「SABANI」で、川畑さおり氏のライブに参加し、その後氏に自身の島唄教室や教授法について取材した。28 日の午前中から 29 日午後までは、喜界島中央公民館にて、喜界島中央公民館に保管されているダンボール箱 6 箱分の久保けんお関係の資料を中心に調査し、さらに資料調査を担当した獣医師・民俗研究家の高坂嘉孝氏から氏が所蔵する久保関係の資料に関する取材を行った。

2024 年 3 月 27～30 日は、徳之島の島唄教室を中心に取材した。「泉憲秀三味線教室」（27 日夜、伊仙町中央公民館）、「泉サダ子三味線教室」（29 日午後、天城町）、「治井春代島唄教室」（29 日夜、亀津の徳之島文化会館リハーサル室）、「中水勝久氏三味線教室」（30 日午後、天城町防災センター）の 4 ヶ所の三味線教室で練習に参加しつつ、取材した。種々の理由でスケジュールの都合がつかなかった以下の 3 名の唄者には、（ ）内の日時に取材を行った。東博光氏（28 日午前中）、中島清彦氏（28 日午後）、指宿桃子氏（30 日午前中）である。さらに地元の三味線店「福盛堂」にて三味線の製作工程について説明を受けたほか、「ワイドミュージック音楽教室」の社長・指宿邦彦に徳之島の音楽事情等について取材した。

2) 民謡研究者・久保けんおの録音資料のデジタル化

民謡研究者・久保けんおは、1960 年に『南日本民謡曲集』を出版した南九州の民謡の採集のパイオニアとして知られている。久保が生前鹿児島県立図書館に預けた録音資料（オープンリール 72 本、カセットテープ 11 本、計 83 本）は、昭和 40 年代に島嶼地域で録音された貴重な録音だが、特にオープンリールの劣化が著しく、デジタル化が急務である。梁川はこの資料の一部を県立図書館から「鹿児島の近現代」教育研究センターに移管し、劣化したテープ類のデジタル化に関して専門技術を有する業者に依頼して、その一部をデジタル化した。

具体的なプロジェクトの成果

本プロジェクトの成果について、以下の 3 点から述べる。1) 学術的成果、2) 地元への貢献、3) 島唄研究資料の充実。1) 本プロジェクトの成果は、まず梁川が原田敬子氏と共同で執筆・出版した民謡研究者・久保けんおを論じたブックレット『南日本の民謡を追って―久保けんおの仕事』に活用された。また、2024 年 3 月に「鹿児島の近現代」教育研究センターが主催したシンポジウム「21 世紀の奄美島唄」における梁川とアンニの発表は、本プロジェクトの直接の成果である。2) については、梁川の著書

「「かずみ」の時代」が奄美大島の新聞等で広く取り上げられ、SNS 等でも話題になった。また、本プロジェクトの調査そのものが SNS 等で取り上げられ、地元の島唄関係者に周知された。南海日日新聞紙上で梁川が連載を開始したことも、本プロジェクトの副産物と考えられよう。3) については、鹿児島県立図書館に保管されていた久保けんおの録音資料の一部を整理・分析して、デジタルアーカイブ構築の基礎を作った。資料全体の分析は今後の宿題であるが、貴重な録音が多く、さらに分析・整理することによって、将来的に奄美群島を含む南日本の音楽文化を語る上で貴重な研究資料となるはずである。

プロジェクトの成果物

< 書籍等出版物 >

梁川英俊・原田敬子『南日本の民謡を追って一久保けんおの仕事』北斗書房、2024年3月

< 論文 >

梁川英俊「声の力ー唄から、言葉から」①「シマグチの輝き」 『南海日日新聞』2024年4月3日

< 講演・口頭発表（国内） >

梁川英俊「島唄の新世紀ー伝統から未来へ」鹿児島大学、奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム「豊穡の奄美ー研究と文化の継承ー」第2部 21世紀の奄美島唄、2024年3月

梁川英俊、里朋樹、里歩寿「21世紀の島唄に向けて」、奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム「豊穡の奄美ー研究と文化の継承ー」第2部 21世紀の奄美島唄、2024年3月

アンニ 「奄美島唄の舞台における歌詞の復権ー1990年代以降の試みを中心にー」東洋音楽学会第74回大会、2023年11月

アンニ 「舞台から見る奄美島唄の変遷」鹿児島大学、奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム「豊穡の奄美ー研究と文化の継承ー」第2部 21世紀の奄美島唄、2024年3月

< メディア報道（国内） >

人物交差点「「かずみの時代」出版へ」、『南海日日新聞』、2023年5月20日

三田もも子、書評「「かずみ」の時代」、季刊「しま」276号、2024年1月

神谷裕司、書評「「かずみ」の時代、島唄の戦後史描く」『南海日日新聞』、2023年10月13日

南海天地、『南海日日新聞』10月22日

書評「ゆかりの本ー「かずみ」の時代」南日本新聞、2023年12月9日



酒井正子氏（左）、前山真吾氏（中央）



川畑さおり氏（喜界町、SABANIにて）



泉憲秀氏（左から3人目）の三味線教室



東博光氏の説明を聞く



中島清彦氏（右端）の説明を聞く



治井春代氏（左から3人目）の三味線教室



泉サダ子氏の三味線教室で



中水勝久氏（左から2人目）の三味線教室

「場」の形成から始まる現代文化創出

プロジェクト参加教員

菅野康太（法文学部人文学科心理学コース准教授）、酒井佑輔（法経社会学科地域社会コース准教授）、太田純貴（人文学科多元地域文化コース准教授）、農中至（法経社会学科地域社会コース准教授）

役割分担

菅野＝全体統括・活動の立案と実施・会計、酒井・太田・農中＝企画

助成額

26万円

プロジェクトの目的

学生や教職員が集いクリエイティブな活動を促進するための場として法文2号館にラーニング・コモンズが整備された。昨年度の本プロジェクトにより、文化的背景を持った家具が設置され、鹿児島在住のイラストレータで本学卒業生の篠崎理一郎氏に過去から現代そして未来への文化的つながりを感じさせるイラストが施された。本年度のプロジェクトでは、この場所から日常的に新たな取り組みが生まれ、イベントや展示などが行われることを促すためのさらなる整備を行なった。

具体的には、代表者が担当する授業のアクティブ・ゼミにおいて、ラーニング・コモンズで継続的に使用できる展示ブース等の設置、イベント用備品や音響機器の選定、そしてイベント企画を行なった。

具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクトの目標は、現代アートをはじめ、作者がこの時代に生き、現在進行形で醸造される文化創出の場に触れる機会が極めて少ない鹿児島において、過去から継承された文化・芸術と現代との連続性のみならず、未来への連続性を自ら創出する場と人を形成することである。これにより、この地域と法文学部から、永続的に文化が創出されるフレームワークを構成することを目指すわけだが、アクティブ・ゼミの受講生がそれに資する体験をすることができた。一部受講生は、過年度から継続して受講してくれていたため、企画立案の経験をしており、企画立案をする上での場の重要性をすでに理解していた。ここでさらに、今年度ラーニング・コモンズを得たことによって、企画を立案し、すぐに実行するということが可能となった。

具体的なプロジェクトの成果

場というハードを得たことで、企画というソフトの実行が可能になり、企画を実行する体験をもとに、さらにハードを改良するという循環が生まれた。授業内で学生が自主的に企画したイベントが開催され、今後も見据えて設備を拡充した（その設備の選定にも学生が関わった）。現在では、県内のアート関係者や県外の研究者から継続的にイベントのチラシの設置が依頼され、学生たちが日常的にそのような情報に触れることが可能な場ともなった。

本プロジェクトが採択された際の予算措置条件として「ひとつの授業に拘らず幅広く学生が参加できるような工夫をお願いします」という要望がなされた。現在、占有使用のための予約は自動化され学内に開かれている。アクティブ・ゼミとは関係なく、学生が自主的な企画をしており、また、地域社会コースでは継続的に複数ゼミ合同の研究会が開かれている。太田純貴准教授のプロジェクトでもラーニング・コモンズでイベントが行われ、アクティブ・ゼミ受講生がファシリテーションも行なった。オープンキャンパスでの学部主催企画の会場ともなった他、広報室や社会連携課も使用するなど、拡張性のある開かれた場となった。

プロジェクトの成果物

<実施したイベント>

2023年7月20日

教員と学生のランチトーク

参加者 20名（法文学部と農学部の教員を囲んで
学生があれこれ懇談）



ラーニング・コモンズ1の簡易展示スペース

2023年7月25日

片桐先生を囲んでジェンダーの関するモヤモヤを共有する会

参加者 8名（女性限定）

2023年7月30日

小学生対象の宿題教室（大学生が小学生に教えながら行うもの）

参加者 20名（大学生が小学生に教えながら行うもの）

<ラーニング・コモンズの状況>

簡易展示スペースを今回のプロジェクトで増設した。その他、備品として音響機器や展示台などもアクティブラーニング準備室に設置し、それらを用いたイベントも可能にした。詳しくは、以下ラーニング・コモンズのウェブサイトへ。

<https://sites.google.com/view/houbun-learcommo/home>

活動報告

2.本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元

地域の歴史・文化・社会に関する講演会やシンポジウム、古文書講座の開催。教育や観光、まちづくり、防災面での地域資源の活用など。

・近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究

渡辺芳郎（法文学系）、清水香（教育学系）

・戦前・戦中期の鹿児島における女子教育に関する研究

佐藤宏之（教育学系）、金井静香（法文学系）

・肝属川の水利をめぐる民俗知と川－人関係に関する調査研究

難波美芸（総合教育学系）、伴野文亮（法文学部）、寺尾萌（法文学部）、尾崎孝宏（法文学系）

・薩摩焼のための新しい素材の探究

清水香（教育学系）、菅野康太（法文学系）

近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究

プロジェクト参加教員

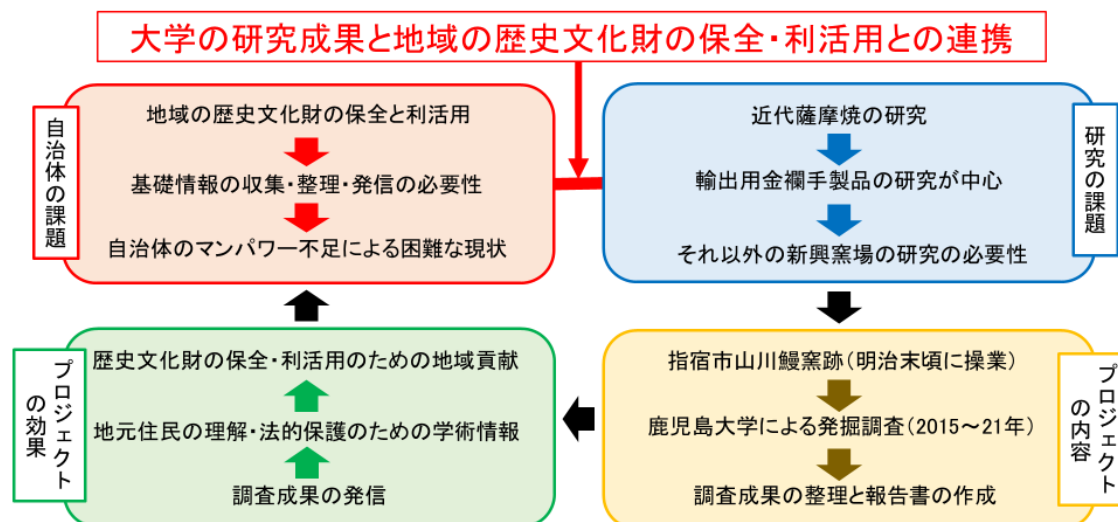
渡辺芳郎（人文学科多元地域文化コース）・清水香（教育学部美術科）

助成額

48 万円

プロジェクトの目的

全国的な「平成の大合併」により地方自治体の文化財関係職員の担当面積は拡大し、十分な文化財把握が滞っているのが実状である。そのため各地域に眠るさまざまな文化資源が開発されず、利活用の機会が失われている。そこで鹿児島大学法文学部人文学科考古学ゼミ（渡辺芳郎ゼミ・石田智子ゼミ）では、2015～2020 年度に指宿市教育委員会と連携して指宿市山川に所在する鰻窯跡の調査を実施した。その調査報告書を作成することで、地域の歴史文化財の保全・活用に役立てることを目的とする。



具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクトの目的の達成のために以下の事業を実施した。

- (1) 報告書作成のための鰻窯跡出土資料の再焼成実験（清水）（2023 年 4～5 月）
- (2) 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター令和 5 年度地域マネジメント教育研究推進事業プロジェクト「指宿まるごと博物館 鰻窯跡とその周辺」（於 指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれ+オンライン）の開催（2024 年 1 月 27 日）
- (3) 『鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の調査と研究』刊行（2024 年 2 月 28 日）

具体的なプロジェクトの成果

1月27日のプロジェクト報告会は対面とオンラインで開催し、西牟田瑛子氏（指宿市教育委員会）「指宿まるごと博物館・鰻池エリアについて」と渡辺芳郎「鰻窯跡の発掘調査でわかったこと」の2本の報告がなされた。また報告終了後、鰻窯跡出土遺物が会場で展示され、渡辺が説明した。対面37名、オンライン8名の出席を得た。

報告書『鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の調査と研究』はA4判、総62ページ、300部を印刷した。再焼成実験結果は報告書に組み込んだ。報告書は指宿市教育委員会など関係機関や、調査・報告書作成にご協力いただいた方々に配付した。

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター
令和5年度地域マネジメント教育研究推進事業プロジェクト

**指宿まるごと博物館
山川鰻窯跡とその周辺**

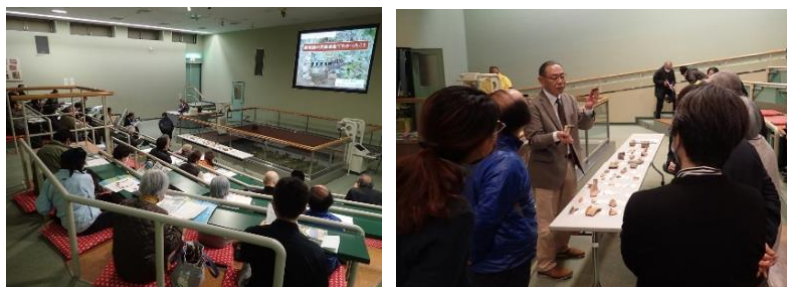


西牟田瑛子(指宿市教育委員会)
指宿まるごと博物館・鰻池エリアについて
渡辺芳郎(鹿児島大学法文学部)
鰻窯跡の発掘調査でわかったこと
※鰻窯跡出土遺物を会場で展示し、説明します。

日時:令和6年1月27日(土)13:30~16:00
場所:指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ 歴史劇場
※参加費無料・予約不要(定員60名)
※オンライン(Zoom)でも開催予定です(遺物説明は除く)。ご視聴希望の方は、1月20日(土)17:00までに、QRコードからフォームにご記入ください。

問い合わせ先:〒890-0065 鹿児島市那光1-21-30
鹿児島大学法文学部 渡辺芳郎研究室
TEL:099-285-7639

主催:鹿児島大学法文学部考古学研究室・指宿市教育委員会



指宿でのプロジェクト報告会（1月27日）
（左：チラシ、右：報告会風景）



『鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の調査と研究』

プロジェクトの成果物

渡辺芳郎編 2024『鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の調査と研究』鹿児島大学法文学部考古学研究室（鹿大リポジトリにて PDF 版を公開（右 QR コード）、<http://hdl.handle.net/10232/0002000142>）



戦前・戦中期の鹿児島における女子教育に関する研究

プロジェクト参加教員

佐藤宏之（教育学系准教授）、金井静香（法文学系教授）

役割分担：佐藤＝研究の総括、デジタル化、資料的価値の分析、金井＝データベース化、資料的価値の分析

助成額

25 万円

プロジェクトの目的

鹿児島女子高等学校に、その前身である鹿児島市立女子興業学校の同窓会報「帰厚月報」が、昭和 9 年(1934)5 月 3 日発行の第 1 号から昭和 19 年(1944)3 月 10 日発行の第 116 号まで所蔵されている。これらは戦前・戦中の女子教育や、銃後を支えた人びとの様子を、ジェンダーの視点から通時的に復元することができる貴重な資料であるが、その保存状況は極めて厳しい。

本プロジェクトは、デジタル化によって資料の保存・活用の基盤を整備し、データベース化によって利活用の基礎を構築するとともに、学校資料に歴史資料としての新たな価値を創出するものである。

具体的なプロジェクトの内容

佐藤は、鹿児島女子高等学校の前身である鹿児島市立女子興業学校の同窓会報「帰厚月報」の資料保全および分析にあたり、鹿児島市教育委員会および鹿児島女子高等学校と数度打ち合わせを行い（2023 年 7 月 3、13 日、8 月 4、30 日）、9 月 25 日に現地調査を実施し、資料を鹿児島大学佐藤研究室へ搬出した。10 月 3 日から 17 日にかけて、「帰厚月報」（昭和 9 年(1934)5 月 3 日発行第 1 号～昭和 19 年 3 月 10 日発行第 116 号）・「帰厚会報」（昭和 51 年(1976)3 月 3 日発行第 37 号～昭和 58 年 2 月 27 日発行第 44 号）を OCR による文字情報の電子化のためスキャナーを用いてデジタル化を行った。資料は、11 月 27 日に返却し、調査内容の報告もあわせて行った。また、『職員録』から教員構成の復元、『鹿児島県統計書』、『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』などの資料集集を行った。さらに、本プロジェクトを進めていく過程で、「明治三十一年(1898)編沿革史鹿児島県曾於郡岩川高等小学校」「明治三十二年十二月

沿革誌稿曾於郡末吉高等小学校」「志布志小学校学校日誌（大正 2 年(1913)2 月～大正 13 年三月）」「志布志女子実業補習学校日誌（大正 6 年 5 月～大正 7 年 2 月）」を新たに発見するに至り、その資料の保全および翻刻作業を行った（2023 年 11 月 7 日から 2024 年 2 月 28 日）。

金井は、10 月 19 日から 11 月 7 日にかけて、デジタル化したデータを基に、各号の記事の細目を採り、検索可能なデータベース（Excel 版）を作成した。また、11 月 7 日から 2024 年 2 月 29 日にかけて、内容分析を行った。

具体的なプロジェクトの成果

「帰厚月報」（昭和 9 年(1934)5 月 3 日発行第 1 号～昭和 19 年 3 月 10 日発行第 116 号）・「帰厚会報」（昭和 51 年(1976)3 月 3 日発行第 37 号～昭和 58 年 2 月 27 日発行第 44 号）のデジタル画像およびデータベース（Excel 版）、「明治三十一年(1898)編沿革史鹿児島県曾於郡岩川高等小学校」「明治三十二年十二月沿革誌稿曾於郡末吉高等小学校」「志布志小学校学校日誌（大正 2 年(1913)2 月～大正 13 年三月）」「志布志女子実業補習学校日誌（大正 6 年 5 月～大正 7 年 2 月）」の史料翻刻データを Google ドライブにてパスワード管理している。今後、これらを利活用に供するための公開にむけた検討を行う。

これまで、学校資料というと学校の歴史を知るために、学校にある（あった）資料にばかり注目が集められていた。現在では、そればかりではなく、地域住民の学業・生業・生活などに関わる地域資料として、個人や地域にある（あった）学校関連資料にまで範疇が拡大し、PTA や同窓会などの資料へも関心が寄せられるようになっている。こうした研究状況をふまえ、ある特定の学校に在学した者同士だけが情報を共有することができる、読者が極めて限定された雑誌メディアであり、同窓会組織と学校組織が在校生と卒業生に「知らせたい」「伝えたい」内容を選別・掲載する雑誌メディアである同窓会報に着目し、同窓会報に何が載せられ（語られ）、主張されているのかを分析し、同窓会組織と学校組織が望む女性像を解明する基盤整備を行うことができた。

とくに、同窓会報の内容分析をとおして、「戦前・戦中期の鹿児島における女子教育を通時的に知る手がかり」・「銃後を支える人びとの様子を通時的に知る手がかり」・「平和学習」・「総合的な探究の時間」の教材としての活用できる新たな価値を見出すことができた。

プロジェクトの成果物

<データベース>

「帰厚月報」（昭和 9 年(1934)5 月 3 日発行第 1 号～昭和 19 年 3 月 10 日発行第 116 号）・「帰厚会報」（昭和 51 年(1976)3 月 3 日発行第 37 号～昭和 58 年 2 月 27 日発行第 44 号）のデジタルデータおよび細目

肝属川の水利をめぐる民俗知と川－人関係に関する調査研究

プロジェクト参加教員

難波美芸（総合教育機構グローバルセンター・講師）：統括およびライフヒストリー調査

伴野文亮（「鹿児島島の近現代」教育研究センター・特任准教授）：肝属川の農業水利に関する歴史資料の調査

寺尾萌（法文学部 ポストコロナ牧畜研究資料室・特任研究員）：畜産用水としての肝属川に関する聞き取り調査・コミュニティセンター等との連絡

尾崎孝宏（法文学部 人文学科多元地域文化コース・教授）：アドバイザー

助成額

50 万円

プロジェクトの目的

本プロジェクトは、鹿屋市とその隣接地域を流れる肝属川を研究対象の中心に据え、川そのものを含む多種と人の暮らしや産業・生業がいかに連関しているのかを明らかにすることを目的としている。そして、環境との関係における民俗知や技術を地域住民と共有するなかで、郷土への愛着を促進するとともに、肝属川という身近な存在を通じて、自然環境と連関しながら成り立つ社会や産業の持続可能性についての地域住民の理解促進に寄与することを目指す。

具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクト内容は実地調査を通して研究関心をなるべく拡大した上で研究の問いを明確化させるフェーズⅠと、キイとなる概念とフォーカスグループとなる対象が定まった上で調査を進めていくフェーズⅡ、そして研究総括の3フェーズに分けることができる。

【フェーズⅠ】（実地調査：2023/9/10-11、11/25-26、12/16-17）鹿屋市の市街地、串良町、吾平町、高隈町での実地調査を行った。

9月の最初の調査では、難波、寺尾、伴野は鹿屋市の市街地で分水路の建設による洪水対策と、地元の人々が「鹿屋川」と呼ぶ市街地を流れる肝属川の水質汚濁及び河岸環境の悪化を受けて「藻つとる作戦」をはじめとする住民活動が活発化し、水質が回復した歴史などをその主催者らへのインタビューから明らかにした。また、串良川に毎年設置される「柴井堰」（マテバシイを用いて作られる自然工法の堰）の設置現場を観察し、周辺で暮らす住民からこの地域における農業水利に関する話を伺った。

市民による河川関連の活動についてより理解を深めるため、難波と寺尾は11月25日・26日に行われた第22回九州「川」のワークショップとそのエクスカージョンに参加した。このなかで、鮎の稚魚の放流やネイチャーフレンドリーな河川設備づくりに向けた行政への働きかけをおこなっている始良川河川愛護会をはじめ、市民団体による河川との関わり方について知り、市民主体の活動や日常生活の中で紡がれる人と水との関係性の重要性を確認した。

12月16日・17日の調査では、難波、寺尾、伴野で笠之原台地の灌漑設備の整備とダム建設の歴史を市民が主体となって後世に語り継ぐ活動を行なっている笠之原開発資料館の運営者へのインタビューと、始良川河川愛護会と共に地域を巡検しながらインタビューを実施した。また、鹿屋市市街地においては、水質汚濁が問題化され人々が川から離れていく以前の肝属川を知る北田商店街の人々にインタビューを行い、漁撈や川遊びを通じた人と川との距離とその変化について理解を深めた。

いずれの市民活動においても、地域の子どもたちが川と触れ合える環境づくりをいかにして行なっていくのかという課題に取り組んでいる実態が明らかとなったほか、魚釣りや山での狩猟、野鳥の観察といった遊びと資源活用が連続的につながっている様態が見えてきた。

【フェーズⅡ】（実地調査：2024/2/4-5、2/17-19、3/9-11、3/15-16）フェーズⅠを受けて対象を明確にした上でより重点的に、①遊びー漁撈と狩猟を通じた川との関わり、②水利用と水害、歴史の語り継ぎ、③治水における川と山の連続性、というテーマから調査を実施した。

2月4日・5日の調査では難波、寺尾、伴野が始良川河川愛護会を対象にインタビューを行い、会のメンバーの幼少期から愛護会発足後の現在に至るまでの活動を振り返ってもらった。これらのインタビューから、漁撈や山での狩猟採集が、遊びであると同時に日々の食糧収集でもあるその連続性の中で、人間と自然との畏怖も含んだ親和的な関係が作られ、山川への心理的距離の近さが生まれるプロセスが浮かび上がってきた。また、高隈地区コミュニティ協議会においても同様のインタビューを行うことで、現在の協議会メンバーが幼少期の頃に行っていた遊びー漁撈活動と、そのようなベースの上に現在の地域の子供達への語り継ぎといった活動があることを確認した。

2月17日～19日には寺尾がさらに高隈地区の中津神社で行われた「かぎ引き祭り」での参与観察を行い、五穀豊穰と林業の発展を願う同祭りが、少子高齢化が進む中でこの地区の人々をいかに結びつけているのか、どのような変化が起きてきたのかを参加者へのインタビューを通して明らかにした。

3月9日～11日には難波と寺尾が串良町の串良川に設置される柴井堰の材料となるマテバシイの伐採現場で観察を行うと同時に、作業中の人々からマテバシイ減少の実態や、設置のための技術をもつ人、そして作業にあたる人々の高齢化などの問題について

話を伺った。近い将来、近代工法による堰の設置が決定しているが、その完成までの間どのようにマテバシイと作業人員を確保するかという課題があることがわかった。

3月15日・16日の調査では実際に柴井堰を設置する作業の全行程を観察し、直接この地区の利水と関わらない市民が、この日本で唯一残る柴井堰設置に関心を持ち、ボランティアとして参加している様子を見ることができた。作業の合間に参加者から話を聞き、柴井堰の自然と融合した機能性とその伝統的な景観が人々を惹きつけ、結びつけていることがうかがえた。

以上の調査から、フェーズIIでは、漁撈や遊びを通じた経験による川と周辺環境の知識の生成とその記憶とが現在の市民活動に大きな影響を与えて、それが後世への語り継ぎにもつながっているということ、そして上流下流で異なる／共通する川をめぐる知識と実践の歴史的な重層性が明らかとなった。

【研究総括】（ワークショップ：2024/3/17）2023年度の活動の総括として、研究報告を兼ねたワークショップを鹿屋市で開催した。難波、寺尾、友野がそれぞれこれまでの研究関心と結びつけながら報告を行い、肝属川水系のくらしと歴史、人と川、環境とのつながりについて調査を通して得られた知見を参加者と共有した。フェーズI・IIの調査における主要インフォーマントと地域住民に参加してもらい、普段は多く交わることのない鹿屋市市街地、高隈、吾平各地域の市民同士が意見交換をする場となり、それぞれの地域が抱える課題や実践について共有することができた。

具体的なプロジェクトの成果

①鹿児島県・大隅半島の内陸に位置する鹿屋市において、肝属川水系の各河川が、農業・工業・生活用水の確保に重要な役割を果たしてきたという地域的背景に、地域住民の川とのかかわりの歴史を位置付けた。昭和20～30年代に生まれた世代の地域住民にとって、地域を流れる川は、遊び場であり、納涼所であるとともに、川で釣るアユ、ウナギ、フナ、鯉などの魚は、日常的に食される食材でもあった。また、笠之原台地の灌漑をめぐることは、計画実現にいたるまでの様々な資料や語り、地域住民個人の手で集められていることが分かった。行政、市民運動などさまざまな立場で灌漑事業に関わった当事者が高齢化するなかで、全国に先駆けて行われた笠之原灌漑事業の記録や資料を、散逸する前に収集することは「鹿児島の近現代」教育研究センターの責務であると確認した。

②近代以前の水利や治水の在り方、個人のライフヒストリーから川と人との関係を捉え、脅威と恩恵がつねに表裏一体である自然としての肝属川の文化的価値を確認・共有した。調査で聞き取った団塊世代の地域住民の語りからは、かれらが少年時代に親や年長の友人たちに倣って、魚の隠れやすい場所や、道具の作り方、使い方などを覚えていった様子が窺えた。川であそぶことにはつねに潜在的な危険が伴うが、子どもたちは可変的な自然を相手にするなかで、スリルを楽しみながらも、安全に遊ぶための身体技

法を自然に身に着けることができた。また、地域住民たちは、つねに川に入り魚を釣って食べていたからこそ、護岸工事や農業・工業廃水等の影響を受けて、川の生態系や水質が著しく変化したことに気づき、今日の河川愛護活動につながったことも分かった。

③地域住民と行政との連携の在り方について学んだ。九州河川協力団体ネットワークを中心として、九州地域には河川愛護団体等の連携が密に行われている。本調査では鹿屋市でも国土交通省国道事務所からの支援も受けつつ、住民参加型というよりも住民発案による嘆願や活動が行われてきた経緯を学んだ。

プロジェクトの成果物

<市民ワークショップ>

2024年3月17日「肝付川水系の川－人関係に関する調査活動報告会：きもつきの川と人のつながり」鹿屋市・北田サルugg。



(左) 高隈でのインタビューの様子

(右) ワークショップの様子

薩摩焼のための新しい素材の探究

プロジェクト参加教員

清水香（教育学部/人文社会科学研究所人間環境文化論専攻）・調査および開発
菅野康太（人文学科心理学コース）・外部連携コーディネーター

助成額

24 万円

プロジェクトの目的

鹿児島には豊富な歴史・文化資源が存在し、近代史や近代文学、民俗学的資料を展示する施設などに恵まれている。他方、現代アートをはじめ、作者がこの時代に良き、現在進行形で醸造される文化創出の場に触れる機会は極めて少ない。このことは、いわゆる現代アートのみならず、工芸品をつくる現代の作家の作品についても同様だろう。このような状況は、工芸品などの伝統産業の今後の持続性にも影響する。過去から継承された文化・芸術と現代との連続性のみならず、未来への連続性を自ら創出する場と人を形成するため、本プロジェクトでは、薩摩焼の新しい素材の開発とその普及に取り組む。

プロジェクトの内容

本プロジェクトは、陶芸家の城雅典氏とともに、薩摩焼の新たな素材の開発に取り組むものである。産地の空洞化（薩摩焼の売上の低下、後継難）を背景に、鹿児島産の原料が手に入らない状態が続いており、新たな作り手が薩摩焼を制作するハードルを下げることを目指し、粘土や釉薬の精査・研究を行った。

まず、実際に美山地区で制作している城氏が感じている薩摩焼の現状と課題をあげ、鹿児島県で陶磁器研究を行っている清水の知見を加えながら薩摩焼原料である白土の継続的な利活用が困難である状況をまとめた。そのなかで根本的な疑問として浮かび上がる「薩摩焼の定義」とはなにか、薩摩焼の原料は過去にどの地方から採集していたのかを、8月29日と2月19日に鹿児島県工業技術センターの歴史的研究資料収集・分析と聞き取り調査を行った。城氏とのメールによる会議を複数回行い、そのなかで鹿児島県内の素材を使った土や釉薬が、その土地の資源を用いた薩摩焼として生産できるのではないかという仮説のもと、鹿児島県産の材料による素地と釉薬に関する実験を行った。具体的には、鹿児島県内で採集できる資源（ウニ殻、カカオ殻、火山灰、珪砂）を薩摩焼の新たな原料として用いることは可能か、薩摩焼製造で使用されている坏土や釉薬をベースに焼成実験を行った（表1）。実験結果から、新たな素材で成形した薩摩焼の試作品を成果物として完成させた。

薩摩焼の定義の再検討や薩摩焼の土採集の現状分析、鹿児島県産材料を用いた新たな土や釉薬の研究をベースに、今後商品化できる器の制作や広報活動を展開していく。

表 1. 鹿児島県の資源を用いた素地と釉薬の実験

| | 阿久根 ウニ殻灰 | 鹿屋 カカオ殻灰 | 桜島 火山灰 | 日置 珪砂 |
|------------------|---|-------------|-----------|----------|
| 1. 土に添加 (in) | 1) 10% 2) 20% 3) 30% | | | |
| 2. 釉薬に添加 (in) | 1) 20% | | | |
| 3. 振りかける | 1) 素地 2) 油滴天目釉 (黒薩摩焼) 3) 3号石灰釉 (白薩摩焼) 4) トルコマット釉 | | | |

プロジェクトの成果





































鹿児島県工業技術センターでの聞き取り調査から、薩摩焼の定義には明確に規定されたものではなく、「鹿児島県内で生産されていること」や「鹿児島県内の原材料を使用していること」というように曖昧に定義されていることがわかった。

鹿児島県日置市美山地区は古くは苗代川と呼ばれ、薩摩藩から続く陶器製造の産地として内外に認知されており、多くの陶芸家が日々作陶している。しかし、近年の窯元の減少に伴い 2022 年 3 月に美山地区にあった福島釉薬株式会社（本社は広島県呉市）の営業所が撤退し、産地で手に入っていた土や釉薬を県外から取り寄せなければ手に入らないという事態に陥っている。それは、地域に根ざしていた資源調達サイクルが崩壊しつつあるということである。現在、鹿児島県内で陶磁器原料を購入できるのは霧島市にある丸二陶料株式会社鹿児島営業所の 1 店舗のみとなり、やきもの原料業界の衰退と薩摩焼という地域の伝統的工芸品の継承者不足が露わになりつつあるといえる。そこで、美山地区で作陶している陶芸家の城雅典氏とともに、若い世代が薩摩焼に魅力を感じ後継者を志すよう、従来の薩摩焼から幅を広げた広義の薩摩焼としての新素材の可能性を探るための基盤作りを行った。具体的に、鹿児島県産材料を使用することに焦点を定めて、県内各地で採集した材料をもとに焼成実験を行った。鹿児島県産材料は、「阿久根市で廃棄されるウニ殻」、「鹿屋市のチョコレート製造工房から廃棄されるカカオ殻」、「鹿児島市桜島地区で廃棄される火山灰」、「日置市の海岸で採集した珪砂」の 4 種類を使用し、大きく分けて薩摩焼の土に添加する実験と、薩摩焼の釉薬に添加する 2 つの実験を行った。実験結果から、各種原料がもつ成分が効果的に現れた。また、添加による成形困難な状況は現れなかったため、製品として使用することが可能なことがわかった。すなわち、鹿児島県という地域で廃棄されるものが、新たな陶磁器原料



聞き取り調査 (2024. 2. 19)

として生まれ変わることが可能であるということを示した。そして、目に見えて衰退しつつある鹿児島県の伝統工芸が、資料収集や聞き取り調査、原料による焼成実験を行ったことによって、更なる発展の可能性があるといえることから、地域の生産者と大学の連携が今後一層必要であることも検討できたことは大きな成果として挙げられる。

| | | 阿久根 ウニ殻灰 | 鹿屋 カカオ殻灰 | 桜島 火山灰 | 日置 珪砂 |
|---------------|-----------------|---|---|--|---|
| | |  |  |  |  |
| 土に添加 (in) | 10% |  |  |  |  |
| | 20% |  |  |  |  |
| | 30% | 成形困難 | | | |
| 釉薬に添加 (in) | 20% |  |  |  |  |
| 振りかける | 素地 |  |  |  |  |
| | 油滴天目釉 (黒薩摩焼) |  |  |  |  |
| | 3号石灰釉 (白薩摩焼) |  |  |  |  |
| | トルコ マット釉 |  |  |  |  |
| | トルコ マット釉 |  |  |  |  |

活動報告

3. 地域的課題把握とその解決に向けた取組み

奄美群島を含め南北 600 km に及ぶ鹿児島県の地理的、歴史的條件に由来する課題の研究とその解決に向けたプロジェクトの企画実施など。

- ・ **地域課題としての水俣病を通じた普遍的課題の異分野間共有と記録の継承**
中川亜紀治（理学系）、農中至（法文学系）
- ・ **地域文化資源としての本場大島紬織物産業の持続可能性に関する調査研究**
馬場武（法文学系）
- ・ **沖永良部島の資源および経済の持続的好循環構築に向けた文理融合型プロジェクト**
澤田成章（法文学系）、大塚彰（農学系）、坂井教郎（農学系）、日高優介（法文学部）、鈴木優作（法文学部）、西村知（法文学系）、佐藤靖明（長崎大学）

地域課題としての水俣病を通じた普遍的課題の異分野間共有と記録の継承

プロジェクト参加教員

中川亜紀治（理工学研究科理学専攻物理・宇宙プログラム 助教）

農中至（法文学部法経社会学科 准教授）

役割分担：中川＝全体総括，読書会主催，講師調整 農中＝社会教育分野間からの助言

助成額

474,820円

プロジェクトの目的

水俣病は不知火海に面する鹿児島・熊本の両県で昭和30年代に起こった社会問題である。発生の背景には明治期から始まる社会構造の変革、高度経済成長期の日本社会の特性など、様々な要因を見ることができる。水俣病には市民、医師、法律家、政治家、自然科学の専門家など多様な立場の者が関わった。いま私たちが享受する一定の安全性を備えた暮らしは、水俣病を乗り越えようと努力した先人たちがもたらした恩恵の一部とも言える。地域が経験したこの史実と教訓を文学、社会、自然科学、写真美術、観光などを活用しながら、分野や時代を超えて共有することを目的とした。

具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクトは3つの活動で構成されており、以下にそれぞれの内容を記した。

(1) 水俣病読書会と水俣見学ツアー

2023年10月から翌年1月にかけて、隔週の金曜日の18時に読書会を開催した。各回の所要時間は2時間で合計9回実施した。参加者は14名、本学学生に加えて市民（無職、新聞記者、農業、幼稚園教諭、小学校教諭など）との混成である。テキストには苦海浄土第2部 神々の村（石牟礼道子著、河出書房新社）をとりあげた。毎回3名が割り振られた部分を音読し、その後に全員で意見を述べ合う。必要に応じて中川から補足説明も行った。2024年2月20日には希望者と共に1泊の日程で水俣市を訪ねて、水俣病に関する場所の見学や、関係者の講話などで知識を深めた。3月には参加者より、全体の活動やテキスト「苦海浄土」についての感想を提出してもらった。

(2) シンポジウム

2023年12月2日（土）、大阪より写真家の小柴一良氏を招き「いま水俣病を考えると 鹿児島の水俣病を撮りつづける写真家との対話」と題したシンポジウムを開催した。法文学部の農中至による司会進行。第1部では理学部の中川が「水俣病のおさらい」と題して講話を行った。第2部では小柴氏、中野あずさ氏（南日本新聞）、中川の登

壇の後、小柴氏による講話と写真紹介を行い、続けて会場との質疑や対話を行った。なお、購入した写真作品5点はこの時に壇上に展示し、参加者に鑑賞して頂いた。

(3) 鹿児島県出水市の見学と調査

シンポジウム翌日の2023年12月3日(日)、写真家の小柴氏、玉利智佳子氏(鹿児島市役所)、中野あずさ氏(南日本新聞社)と共に出水市を訪ねた。鹿児島県内の水俣病多発地区や1970年代に小柴氏が取材した場所(荒崎、米ノ津、前田など)を巡り、当時の状況を詳しく伺った。またこの日の見学の全行程において、地元TV局であるMBCの取材班が同行し、取材をうけることとなった。

具体的なプロジェクトの成果

本プロジェクトでは「水俣病」を鹿児島の近現代に発生した大きな事象として位置づけ、それが後世にもたらし続けている様々な影響を、未来を見すえながら肯定的に捉え、読書会や水俣見学ツアーなどの具体的な企画を通じて共に学び考えることを試みた。各活動の参加者は学生だけに限定せず、市民にまで広げて実施する事ができた。また文理を横断する多様な学部からの学生参加も実現できた。これは教育研究拠点整備事業の趣旨や地域における大学のあり方に鑑みても、たいへん有意義であったと考える。

(1) 水俣病読書会と水俣見学ツアー

読書会の参加者は学生と市民から構成され、幅広い年代間の知識共有と対話が実現した。鹿児島もまた熊本と並び水俣病問題が発生した県であるという認識は、参加者に強い印象をもたらし、市民と共に史実を通して鹿児島の近現代を見つめる良い機会であった。テキストの「苦海浄土」は、その内容と文章量から一般的にやや敷居の高い書籍と言われるが、この読書会が本書に挑む良い機会を与えたようであった。また、テキストに描かれた時代背景の、ご年配の参加者による実感を伴ったリアルな補足説明は、私自身や学生にとって思いも寄らぬ貴重な収穫であり、時代を超えて理解を深めることに大いに役立った。2月に実施した水俣の見学ツアーは、一部の学生や市民から大きな関心が寄せられており、今後も継続や参加の希望がたいへん多い。

(2) シンポジウム

県外も含めて80名を超える参加があり、新聞やニュースでも多く紹介された。原因企業チッソの元社員や長年にわたり水俣病と関わる方も聴衆として参加され、講話や対談が良質な緊張感のもとに実現できた。参加者の感想からは、鹿児島で水俣病が発生したという認識を持たない市民の存在が明らかになった。写真家の小柴氏には多くの質問が飛び、予定調和に終わらないライブ感あふれるやり取りとなった。物語を添えた「組み写真」の手法で展示した作品5点への感想も多く寄せられた。現在は講話と対談の文字起こしを進めており、今後の教育研究のための記録として残してゆく。また県外の大学から理系研究者がシンポジウムへ出席していた事には、プロジェクト立案者として大

変勇気づけられた。文理融合を掲げる本プロジェクトにおいて、一つのささやかな成果だと思っている。

(3) 出水市の見学と調査

鹿児島県出水市の水俣病発生地区や小柴氏が1970年代に取材した場所を訪ねた。この様子が12月7日放送のMBCニュースで丁寧に紹介されたのは、本プロジェクトの問題提起が市民にも見える形で届いた点において成果であった。プロジェクトメンバーに加えて水俣市の知人も同行し、出水市の荒崎地区や米ノ津地区の漁港を訪ねて地域の方々の声を聞いた。その内容からは、水俣病がまだ辛うじて周囲の身近な「人」や「物」を介した「直接的経験」として記憶されていることが分かった。しかし、資料などによる「間接的経験」でしか知識を得られない時期が来るのも、もはや時間の問題であろう。調査で得た知見は、私自身が担当する共通教育科目での講義や理学部における専門科目において、学生たちにも紹介し、記録の継承を試みてゆく。

プロジェクトの成果物

<書籍等出版物>

- ・「いま水俣病を考えること 鹿児島大がシンポジウムを開催」文教速報 9366号
(2024年2月16日)

<学術貢献活動>

- ・「鹿児島近代」教育研究センター地域シンポジウム『いま水俣病を考えること 鹿児島の水俣病を撮りつづける写真家との対話』（鹿児島大学、2023年12月2日開催）写真5点の展示。第1部で中川の講話。第2部で写真家の小柴一良氏の講話と対談。

<メディア報道>

- ・「写真家と共に「水俣病を考える」」南日本新聞（2023年11月29日）
- ・「水俣病教訓見つめ直す 鹿大でシンポ」南日本新聞（2023年12月3日）
- ・「熊本だけでなく鹿児島でも 写真家が見つめ続けた水俣病」MBC 南日本放送
- ・MBC ニュースナウ（2023年12月7日）
- ・「写真通じ水俣病考える 鹿児島大でシンポ 80人参加」毎日新聞 鹿児島、熊本（2023年12月9日）



(左) シンポジウム第2部「写真家との対話」の様子。

(右) 水俣病読書会で「苦海浄土 第二部」を音読。学生と市民が共に参加した。

鹿兒島大学法文学部附属「鹿兒島の近現代」教育研究センター 地域シンポジウム 入場無料

いま水俣病を 考えること

Contemplating Minamata Disease Today

プログラム

【第1部】
水俣病のおさらい
中川 幸紀尚
(鹿兒島大学 理学部)

【第2部】
写真家と対話
小塚一良氏を迎えて
進行: 奥中 至
(鹿兒島大学 法文学部)

鹿兒島の水俣病を 撮りつづける写真家との対話

ゲスト:
小塚 一良
(写真家)

場所:
鹿兒島大学 法文学部
1号館 2階 201教室

日時:
12月2日(土)
13:00 - 15:30

2023.12.2

「いま水俣病を考えること 鹿兒島の水俣病を撮りつづける写真家との対話」
シンポジウム フライヤー

地域文化資源としての本場大島紬織物産業の持続可能性に関する調査研究

プロジェクト参加教員

馬場 武（法文学部法経社会学科経済コース）：主管（調査研究の計画・実施）

連携機関：本場大島紬織物協同組合（鹿児島市）

協力機関：株式会社さくら優和コンサルタント（鹿児島市）

助成額

50 万円

プロジェクトの目的

伝統的工芸品である本場大島紬は日本を代表する文化資源であり、『鹿児島の近現代』教育研究拠点整備事業が対象とすべき地域文化資源の一つである。本場大島紬は、鹿児島の文化的な価値だけではなく、鹿児島の地場産業としての経済的な価値の側面も有する。しかし、大島紬織物は産業のライフサイクルの衰退期にあり、その持続可能性に課題を抱えている。

本プロジェクトの目的は、地域文化資源としての大島紬織物産業の持続可能性に影響を与える要因について、生産と流通そして消費の三つの側面から明らかにし、産地組合および地域内の協力者とともに、その解決策を検討することである。

具体的なプロジェクトの内容

連携機関である本場大島紬織物協同組合（鹿児島市）との協働により、本プロジェクトでは、以下三つの調査研究事業を実施した。また、連携機関の本場大島紬織物協同組合と協力機関のさくら優和コンサルタントと毎月 1 回～2 回程度の定例会を開催し、調査を踏まえて、本場大島紬織物協同組合の中長期経営計画の中核部分について検討を行った。

1. 生産者（織元）の調査

本調査の目的は、大島紬織物産業の生産の現状を明らかにし、生産面における大島紬の持続可能性を脅かす要因を明確にすることである。下表の通り、産地組合に所属する大島紬生産者 5 名に半構造化インタビューを実施した。

| 調査対象者 | 実施日 | 場所 | インタビュー時間 |
|-------|----------|--------|-----------|
| A 氏 | 10 月 2 日 | 組合会議室 | 2 時間 00 分 |
| B 氏 | 10 月 3 日 | 組合会議室 | 1 時間 33 分 |
| C 氏 | 10 月 3 日 | C 氏事業所 | 1 時間 11 分 |
| D 氏 | 10 月 3 日 | D 氏事業所 | 1 時間 36 分 |
| E 氏 | 10 月 4 日 | 組合会議室 | 1 時間 19 分 |

2. 流通業者（卸売・小売）の調査

本調査の目的は、大島紬織物産業の流通の現状を明らかにし、流通面における大島紬の持続可能性を脅かす要因を明確にすることである。名古屋・東京・京都の流通事業者10社に以下の通り聞き取り調査を実施した。インタビューは、いずれも経営意思決定者あるいは大島紬の担当責任者である。

| 調査対象者 | 実施日 | 場所 | インタビュー時間 |
|-------|--------|--------|----------|
| F社 | 10月18日 | 名古屋本社 | 1時間26分 |
| G社 | 10月18日 | 東京本社 | 1時間00分 |
| H社 | 10月19日 | 東京本社 | 1時間14分 |
| I社 | 10月19日 | 横浜本社 | 1時間13分 |
| J社 | 11月2日 | 組合会議室 | 44分 |
| K社 | 11月10日 | 組合会議室 | 1時間19分 |
| L社 | 1月25日 | 京都本社 | 1時間5分 |
| M社 | 1月25日 | 京都本社 | 1時間9分 |
| N社 | 1月26日 | 京都貸会議室 | 28分 |
| O社 | 1月26日 | 京都貸会議室 | 31分 |

3. 消費者の調査

本調査の目的は、大島紬に対する消費者の認識を明らかにし、消費面における大島紬の持続可能性を脅かす要因を明確にすることである。具体的には次の3会場のイベント来場者に質問紙票調査を実施した。3会場の質問紙票の総回収数は919であった。

| イベント | 実施日 | 場所 | 回収数 |
|--------------|------------|-------------|-----|
| 大島紬コレクション東京 | 12月15日～17日 | 東京銀座時事通信ホール | 125 |
| 大島紬コレクション京都 | 1月25日～27日 | 京都産業会館ホール | 219 |
| 本場大島紬フェスティバル | 2月23日～25日 | マルヤガーデンズ | 575 |

具体的なプロジェクトの成果

「1. 生産者（織元）の調査」から、生産面における大島紬の持続可能性を脅かす主たる要因は、ものづくりを実現する資源の枯渇であることがわかった。具体的には、職人（織工や締者、道具製作者）の減少（ヒト）、知識や技術の継承の断絶（情報・知識）、顧客への意匠提案力の弱さ（知識）などである。

また、「2. 流通業者（卸売・小売）の調査」から、流通面における大島紬の持続可能性を脅かす根本的な原因は、顧客を魅了するファッション産業としてのクリエイティブ性の欠如であることがわかった。流通事業者によると、和装市場の縮小期の現在でも、大島紬の顧客の認知度やブランド力は高いが、デザインなどの感性要素が劣っているという。

さらに、「3. 消費者の調査」から消費者の大島紬へのイメージを分析すると、高級・軽い・着やすいなど、単純な機能的価値や情緒的価値しか想起されず、消費者個人で認識される複雑なイメージは想起されず、消費者それぞれの価値認識に依存する文

脈的な価値は確認できなかった。このことから大島紬はファッション産業として保守的で非革新的な立ち位置にあると理解される。

3つの調査研究の結果を踏まえて、組合の理事長と参事を中心に、組合の経営計画の中核となるパーパス（社会における存在意義）を次のとおり策定した。

『伝統と革新を紡ぎ、人々の幸せを織り続ける』 今こそ本場大島紬織物の原点である「ものづくり」に回帰し、持続可能なファッション産業の一つとして、人々の幸せの実現のお手伝いに取り組み続けます。

また、パーパスに基づく組合のビジョンとして「伝統の継承と文化の創造」と「ステークホルダーの幸せ実現」の二つを設定した。今後は、組合員の行動指針を策定し、具体的な戦略や事業を立案していく予定である。

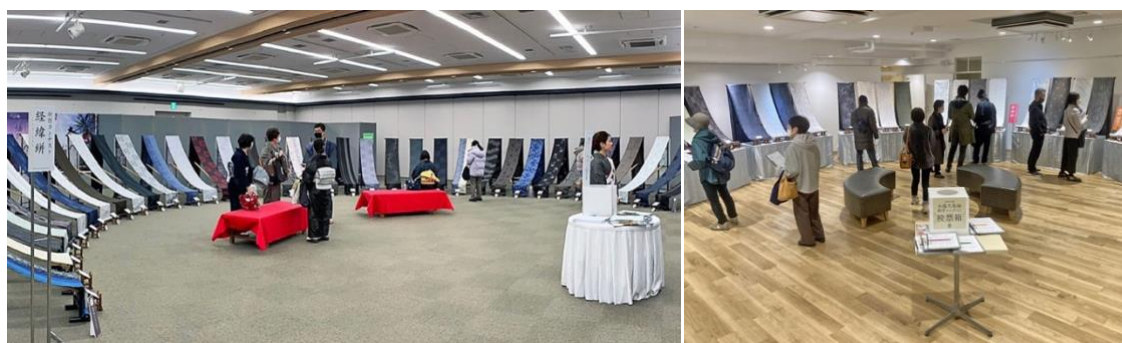
プロジェクトの成果物

< 報告書 >

馬場武「大島紬消費者質問紙票調査報告書：大島つむぎコレクション 2023 京都会場」、2024年3月16日。

馬場武「大島紬消費者質問紙票調査報告書：大島つむぎコレクション 2023 東京会場」、2024年3月16日。

馬場武「大島紬消費者質問紙票調査報告書：本場大島紬フェスティバル 2023」、2024年4月15日。



質問紙票調査の様子

(左) 大島紬コレクション（京都産業会館ホール）

(右) 本場大島紬フェスティバル（鹿児島市マルヤガーデンズ）

写真提供：連携機関 本場大島紬織物協同組合

沖永良部島の資源および経済の持続的好循環構築に向けた文理融合型プロジェクト

プロジェクト参加教員

澤田成章（法文学部准教授）、大塚彰（農学部教授）、坂井教郎（農学部）、日高優介（法文学部附属「鹿児島近現代」教育研究センター特任助教）、鈴木優作（法文学部附属「鹿児島近現代」教育研究センター特任助教）、西村知（法文学部教授）、佐藤靖明（長崎大学准教授）

役割分担：澤田＝統括、大塚＝成分分析・畜産に関する助言等、坂井＝作物・食料品の流通に関する助言等、日高・鈴木＝沖永良部の教育に関する助言等、資料収集・電子化支援、イベント実施支援、西村＝シンポジウム企画支援等、佐藤＝バナナの利活用に関する助言等

助成額

100万円

プロジェクトの目的

近代以降の沖永良部島が本土とのかかわりの中で産業構造を転換しながら社会を発展させてきた歴史を整理し、それらの経路依存的な結果として現代の沖永良部島が抱える社会的課題について明らかにし、持続的好循環を構築するためのボトルネックを明らかにする。これを達成するために、①沖永良部島の持つ地域資源（バナナをはじめとする未利用資源）の量を推定するための基礎調査を実施し、②地域内経済循環および資源循環を強化するためのボトルネックを探究し、③沖永良部島でひとが成長し続けるためのボトルネックを探求する。

具体的なプロジェクトの内容

①沖永良部の地域資源の基礎調査

●国頭小学校区における島バナナ探検隊調査（12月）：佐藤准教授に助言依頼

第2回バナナ探検隊 in 沖永良部を国頭小学校協力の元実施し、国頭地区のバナナの分布に関する調査を実施した。

●バナナ葉の成分分析：澤田ゼミがサンプル回収⇒大塚教授へ依頼

●バナナ偽莖サイレージ発酵による飼料化の可能性の探究⇒大塚教授へ依頼

●バナナ葉パウダーの試作（7月）、市場性調査（11月学祭出店）、特産品開発

●バナナ価格適正化に向けた新商品リリース

バナナ葉パウダーを練りこんだサーターアンダギーの開発、試作、試作品販売（大学祭）や、ゼミ生の起業した株式会社によるバナナの実を用いた新しい特産品開発を行った。

②地域内経済循環および資源循環を強化するためのボトルネック探究

●奄美大島・徳之島で畜産業を営む企業様訪問・ヒアリング（2月・3月）

奄美大島の奄美ミート（2月）およびみなみ君の卵（2月）、沖永良部島の平さん（3月）、徳之島の宮本商店（3月）にヒアリングを実施し、地域内での食料調達向上に向けた課題の1つである畜産物について、なぜ群島内での供給が低下してきたかについてのヒアリングを行うとともに、持続的な畜産モデル構築に向けたディスカッションを実施した。

●和泊町学校給食センター使用食材のフード・マイレージ算出

和泊町学校給食センターに提供いただいた資料を基に、使用食材それぞれについてフード・マイレージを算出した。

③沖永良部島でひとが成長し続けるためのボトルネック探求

「鹿児島県の近現代」教育研究センター地域シンポジウム第2回“沖永良部の近現代-沖永良部の現在-”を実施（12月）し、沖永良部ではたらく若者や外国人、UIターン者の声を聴き、議論する場を設定した。また、皆村武一名誉教授による和泊町立図書館への資料寄贈作業をサポートし、地域後の拠点としての和泊町立図書館の役割について議論した。

具体的なプロジェクトの成果

①沖永良部の地域資源の基礎調査

前年度に得られた内城小学校区における結果では風が少なく水の豊富な島内の内陸部についてのデータが得られたが、今回は海岸線に比較的近く風の影響を受けやすい、かつ水の乏しい地域でのデータが得られた。得られたデータはGIS（地理情報システム）に蓄積し、紙媒体の国頭小学校区バナナマップも国頭小学校に提供している。

澤田ゼミ生が商品化したバナナフレーバーラム（リキュール）は一般社団法人奄美群島観光物産協会が主催する物産展・商談会イベント「ぐーんとマーケット」および「あまみ島一番コンテスト」において優秀賞を受賞し、地域資源の有効活用に対する外部評価を得た。

バナナ葉パウダーを練りこんだサーターアンダギーを新商品として開発し、島内事業者に量産を依頼。鹿大祭において販売を実施（沖永良部商店）し、全量売り切った。

②地域内経済循環および資源循環を強化するためのボトルネック探究

循環型畜産業の離島モデル構築に向けたヒアリング結果の蓄積と仮説の構築
和泊町学校給食センター使用食材のフード・マイレージ算出（+論文投稿）

③沖永良部島でひとが成長し続けるためのボトルネック探究

若者に割り振られる仕事が単なる作業となりがちで、若手にとって自己成長を実感し難い構造になっている可能性があることが明らかとなった。

プロジェクトの成果物

<論文>

澤田成章「和泊町学校給食センター使用食材のフード・マイレージ分析」『経済学論集』第102号 p. 76-86. 2024年3月.

<学術貢献活動>

「鹿児島島の近現代」教育研究センター地域シンポジウム『第2回沖永良部の近現代—沖永良部の現在—』（和泊町、2023年12月8日開催）（知名町、2023年12月9日開催）



（左上）12月9日シンポジウム

（右上）島バナナ探検隊@国頭小学校



（左下）試作バナナ葉パウダー

（右下）鹿大祭「沖永良部商店」

活動報告

4. 教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進

芸術文化などの地域資源を社会に活用できるマネジメント人材の育成、小中高等学校と連携した歴史教育プログラムの開発など。

・指宿の地域資源の探究2：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業

石田智子（法文学系）、吉田明弘（法文学系）、
兼城糸絵（法文学系）、馬場武（法文学系）

・旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト

小林善仁（法文学系）、南直子（法文学系）、永迫俊郎（教育学系）

・「種子島研究」の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用

出口英樹（総合教育学系）、日高優介（法文学部）、鈴木優作（法文学部）、
坂井美日（総合教育学系）、森裕生（総合教育学系）、川端訓代（総合教育学系）、
石走知子（総合教育学系）、伊藤奈賀子（総合教育学系）、中里陽子（総合教育学系）

指宿の地域資源の探究 2：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業

プロジェクト参加教員

石田智子（人文学科多元地域文化コース准教授）、吉田明弘（人文学科多元地域文化コース准教授）、兼城糸絵（人文学科多元地域文化コース准教授）、馬場武（法経社会学科経済コース講師）

役割分担：石田＝全体統括・文化資源の調査研究、吉田＝自然資源の調査研究、兼城＝文化資源の調査研究、馬場＝地域資源のマネジメント

助成額

25 万円

プロジェクトの目的

鹿児島大学法文学部と鹿児島県立指宿高等学校の連携事業を通して、地域資源に対する理解を深め、地域で活躍する人材育成に貢献することが目的である。特に、指宿を中心とする南薩の地域資源（文化資源・自然資源）を新たに発見して調査研究を進めるとともに、地域マネジメントの視点を組み込むことで今後の活用に向けたシステムを構築する。地域の多様なアクターとの共創による価値創造によって、地域への知の還元を目指す。

具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクトは、鹿児島県立指宿高等学校の総合的な探究の時間「柏葉」における地域課題の解決を目指す探究活動（柏葉 ACTIVA）との連携を通して、鹿児島大学法文学部の多様な専門知を地域に埋め込む取り組みである。令和 4 年度に構築した大学と高校の関係を基盤として継続して実施した。

令和 5 年度は、プロジェクト開始前の 5 月 12 日に指宿高等学校にて前年度の成果や改善点を打ち合わせし、それを踏まえて今年度のプロジェクトの計画を立案した。7 月 25 日の指宿高等学校の柏葉一日総合大学では、法文学部教員 3 名による出前授業を実施し、探究活動の進捗確認および大学と高校の意識共有を図った。

8 月 10 日には合同ワークショップ「指宿の未来への贈りものプロジェクト」を鹿児島大学で開催した。合同ワークショップに先立ち、指宿高等学校の生徒・教諭とともに、鹿児島大学郡元キャンパスを案内し、各施設を見学した。合同ワークショップには、鹿児島大学から 31 名（学生 19 名・教員 12 名）、指宿高等学校から 29 名（生徒 26 名・教諭 3 名）が参加した。探究活動に主体的に取り組む高校生に加えて、多様な専門分野を学ぶ多くの大学生・大学院生や教員が直接交流し、意見交換する場を設けることで、多角的視点から積極的に議論し、地域課題の認識や調査方法、成果のまとめかたなどに

関する理解を深めた（写真1・2）。高校生と大学生だけでなく、大学院生、留学生、学部や学科をこえた交流にもつながった。



写真1 合同ワークショップの議論風景



写真2 合同ワークショップの成果発表



写真3 柏葉 ACTIVA 校内発表会



写真4 山川製塩工場跡での説明

12月16日には指宿高等学校で行われた柏葉 ACTIVA 成果発表会に参加し、高校生の活動成果に対して鹿児島大学の学生・教員から講評する機会を得た（写真3）。出前授業－合同ワークショップ－成果発表会の一連の流れに継続して参画することで、高校生や大学生の変化を認識することができた。

高大連携事業と併行して、指宿を中心とする南薩の地域資源を探究するために巡検を実施した。12月16日には、柏葉 ACTIVA 成果発表会に参加した後に、指宿の自然環境に焦点をあてた巡検を実施した（写真4）。また、2月28日には、法文学部開講



写真5 河野覚兵衛家墓石群での説明

科目「考古学実習 1」の一環で、南薩の歴史文化に焦点をあてた巡検を実施した（写真 5）。多様な興味関心をもつメンバーで複数回の巡検を実施することで、指宿を中心とする南薩には多面的な魅力をもつ地域資源が豊富にあることを再認識した。

指宿高等学校で 2 月 20 日に最終打ち合わせを実施し、今年度の連携事業の総括および次年度以降の連携方法について議論した。複数回のイベントを協働で実施し、相互に往来することで、高大連携事業に対する考えや期待、課題を共有することができた。

令和 4～5 年度の二年間のプロジェクトで得た成果を踏まえて、郷土資料の記録化・可視化などの具体的な作業を今後進める予定である。

具体的なプロジェクトの成果

鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業を令和 4～5 年度の 2 年間継続して実施することで、高校生が関心をもつ地域課題のテーマ、高校生の探究活動でつまずきやすいポイントや取り組みやすい内容・方法、大学生・大学院生がもつ専門知や技能の特長、高校生と大学生が直接交流することで得られる効果、探究活動にかかわる高校教諭の考えについて、実践活動を通じて把握することができた。令和 4 年度の取り組みによって高校および大学のカリキュラムや年間スケジュールを把握したので、令和 5 年度は非常に円滑に高大連携事業を進めることができた。令和 5 年度は、鹿児島大学の法文学部生だけでなく、他学部の学部生、大学院生や留学生、多分野の教員等の参加があり、新たな刺激をもたらすとともに、法文学部の取り組みとして本プロジェクトを広く周知することに成功した。連携事業に参加した学生たちは適切な方法で地域の状況を認識し、責任をもって行動し活躍する人材となることが期待される。

巡検を実施することで、文化資源・自然資源を総合化する多様な地域資源が指宿を中心とする南薩に存在することを確認した。巡検でご対応いただいた諸氏・諸機関には鹿児島大学の取り組みについてご理解いただくとともに、引き続き今後ご協力くださる見通しを得た。

令和 5 年度のプロジェクトの成果は報告書としてまとめた。連携事業にご協力いただいた関係者や機関に配布する。令和 4 年度成果報告書は指宿高校で活用されており、令和 5 年度の報告書も探究活動における高校生の経験を学年をこえてつなぐ資料とする報告書作成の目的を達成する予定である。これまでに構築してきたネットワークを活かして、次年度以降はさらなる展開を企画している。

プロジェクトの成果物

< 報告書 >

石田智子編『指宿の地域資源の探究 2：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業報告書』、2024 年 3 月 15 日。

旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト

プロジェクト参加教員

小林善仁（法文学部人文学科准教授）・南直子（法文学部人文学科助手）・永迫俊郎（教育学部准教授）

役割分担：小林＝地理的・歴史的分野の指導、事業の総括、南＝地理的分野の指導、学生支援、永迫＝観光的分野の指導

助成額

25 万円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、明治初期の廃藩後に旧城下町となった鹿児島市街地（鹿児島城跡を含む）の近代における地理的・歴史的状况とその変容過程を明らかにし、且つ得られた調査・研究成果を大学教育ならびに地域での生涯学習（博物館施設）などに活用することである。この点は、「『鹿児島の近現代』教育研究拠点整備事業」の目指す、本学や地域の所蔵する歴史的・文化的・地理的資源の調査・研究と地域への成果の還元はもとより、地域課題を踏まえたまちづくりと地域の社会教育・郷土教育にも資する地域振興の取り組みの一つである。また、プロジェクトのもう一つの特色が地域の博物館施設と大学の共同実施であり、本年度は鹿児島市立ふるさと考古歴史館（以下、ふるさと考古歴史館と略記）の協力のもとで行った。

プロジェクトの内容

本プロジェクトでは、まず対象地域である鹿児島市街地で「城跡」「寺跡」「繁華街」「郊外」の四つの調査テーマを設定した。戦国期や幕末・維新时期の人物史に偏りがちな鹿児島市の地域教育と観光振興のなかで、上記の4テーマは不明な点を多く残しており、これらの解明は地域史だけでなく、生涯学習や学校での地理・歴史教育、観光商品の開発などにも役立つと考える。そこで、数年がかりでこれらに関する歴史的・地理的・文化的情報の収集を行い、本年度は鹿児島城跡と周辺地域（とくに城北エリア）の調査を行うこととした。

実施内容は、①従来の文献調査とフィールドワークによる情報の収集・分析、②古地図をはじめとする地理資料の収集、③鹿児島市街地の近代的事象の相対化（鹿児島県内・県外）により他地域の事例との比較・検討を行う。①では近世・近代の既知の文献から情報を収集するとともに、数度の現地観察を行い、鹿児島城堀跡や興国寺墓地などの調査では近代以降の土地利用の変化に関する新たな知見を得た。また、②では古地図や地誌・案内記類に偏りがちな近代の地理資料の中で、街並みなどを写した写真帳に注

目し、鹿児島市街地を対象とする明治40（1907）年発行の『鹿児島県写真帳』（図1）と大正3（1914）年の桜島噴火を記録した『鹿児島県桜島大爆発写真帳』を入手した。このうち、前者は管見の限り鹿児島県立図書館などの県内公共図書館や国立国会図書館、鹿児島大学附属図書館にも所蔵されていない明治後期の鹿児島市街地と県内各地の様子を記録する貴重な景観資料であり、今後の分析と画像の公開などを行うことにより、多くの発見と活用が期待される。最後に、③は旧城下町の鹿児島と比較する対象として、九州に位置する大藩の城下町である福岡と熊本を選び、古地図や案内記などの歴史・地理に関する資料調査と両市街地での現地観察を実施した。

プロジェクトの成果

今年度の取組みで得られた成果は大きく三つある。一つには、調査を通じて近代初頭の鹿児島城と周辺部（とくに城北エリア）の地理的変化に関する新知見を得られたことである。とくに城堀の埋立ては福岡城や熊本城と比べて、鹿児島城の北を限る吉野橋・新橋堀の埋設時期は早いことが分かり、堀跡の埋立地を廃仏毀釈で廃止された福昌寺（島津家旧菩提所）と大乘院（島津家旧祈願所）の再興後の境内地としたことは特筆すべき点である。

二つには、研究成果を大学の地理教育と地域の生涯学習に活用できた点である。法文学部令和5年度後期授業科目「地理学講義A」のなかで近代の鹿児島城跡と地域変化（城跡の近代的変化、廃仏毀釈など）に関する内容を取り上げ、これに関連したフィールドワークを令和6（2024）年1月27日に鹿児島市上町地区～天文館地区で実施した（図2）。参加した学生たちにとっては座学では得られない新鮮な学びであったことが授業の感想シートから読み取れ、授業に登場した史跡に実際に足を運び、現地で説明を聞いて観察することで、知識の定着だけでなく、新たな発見と気付きに繋がるなどの教育効果もあった。この点は、ふるさと考古歴史館の「まち歩き」イベント（同年4月14日開催）でも同様であり、既往の郷土本やガイドブックには記されていない事柄に対する知的欲求や需要の多さを感じることができた。

三つ目には「博学連携」の取組みとして、ふるさと考古歴史館教養講座「絵図にみる近世の「鹿児島城」」を令和6年2月24日に開催して市民に調査・研究の成果を話すと共に、前述の鹿児島城北エリアのまち歩きのゲストスピーカーを小林が務めた。これに関連して、まち歩き素材の開発を視野にいたした基礎資料の提供とガイドブックの共同作成も行った（図3）。まち歩きのノウハウ共有と情報提供・交換などからなる「博学連携」の取組みは、今後、行政や他の博物館施設などとの連携・共同実施にも繋がるものと考えている。

また、プロジェクト全体を通じて、ふるさと考古歴史館学芸員の中村友昭氏と相互に連携して、それぞれの専門的視点から同一地域に関する意見交換を現場で行うだけでなく、鹿児島市をはじめとする地方自治体の文化財行政が抱える地域的課題に関しても意

見を交換し、認識の共有と今後の課題解決のための取り組みを考える機会を得た。この点は、本センターの「『鹿児島県の近代』教育研究拠点整備事業」の今後の方向性や取り組みなどを考える際にも考慮すべき点と考える。



図 1. 『鹿児島県写真帖』明治 40（1907）年発行



図 2. 「地理学講義 A」でのフィールドワーク



図 3. 町歩きガイドブック ※作成：鹿児島市立ふるさと考古歴史館

「種子島研究」の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用

プロジェクト参加教員

出口英樹（総合教育機構 高等教育研究開発センター 准教授）、日高優介（「鹿児島
の近現代」教育研究センター 特任助教）、坂井美日（総合教育機構 共通教育センター
准教授）、森裕生（総合教育機構 高等教育研究開発センター 助教）、川端訓代（総合
教育機構 共通教育センター 准教授）

役割分担：出口・日高・坂井＝現地調査・資料探索、森、川端＝資料探索・活用補助

助成額

50 万円

プロジェクトの目的

鹿児島を代表する民俗学者である下野敏見（1929 年－2022 年）は多くの蔵書や民俗資料を遺した。ここではそれらを「下野コレクション」と呼称する。この下野コレクションは西之表市の種子島開発総合センター（鉄砲館）に収められているが、十分な整理は行われておらず、ほとんど活用されていない。

また下野は高校教員時代に県内各地に赴任し、生徒とともに郷土の歴史や文化に関して調査・研究を行っていた。鹿児島県立種子島高等学校（鹿児島県立種子島実業高等学校と合併前のいわゆる旧種子島高校）在職中も同校に郷土研究部を作り、その活動の成果は『種子島研究』という冊子（全 24 号＋別巻 1 号）にまとめられた。しかし、西之表市立図書館にも全号が納められているわけではなく、現在の種子島高校にも完全な形では保管されておらず、散逸しているのが現状である。

以上のような状況を踏まえ、下野の貴重な遺産を継承し、活用していく取り組みが重要であると考えている。そこで、その端緒として『種子島研究』について探索を行い、整理し、電子アーカイブ化した上で、学校等における教材として活用することを目的とする。

具体的なプロジェクトの内容

上記のように鹿児島を代表する民俗学者である下野敏見が旧種子島高校在職中に郷土研究部の生徒とともに種子島の民俗や歴史・文化などの調査（フィールドワーク）を行い、成果を『種子島研究』という冊子にまとめた。その内容は大学の研究者が同書をリファレンスするなど高校生がまとめたものとは思えないほど高く評価されたものの、現時点においてはあまり顧みられていないのは既述のとおりである。

以上を踏まえ、本プロジェクトは必要な活動を以下の 7 つのステップに分けて遂行することを計画した。

- ①冊子『種子島研究』の所在を確認する
- ②その通巻の内容を整理する（総目次の作成）
- ③可能な限り当時の執筆者を訪ねヒアリング調査を行う
- ④その内容の電子化を進めアーカイブする
- ⑤このアーカイブを活用するために必要な法的処理（権利関係）の整理を行う
- ⑥実際に学校教育にこれを活用する
- ⑦将来的には種子島の地域活性化に資する活用の提案を行う

当初はこれら全てを単年度で完遂するつもりであったが、実際にプロジェクトに取り組んでみると、作業量としても費用の面でもそれがほぼ不可能であることが明らかとなった。そこで、①～⑦のうち本年度は①～②に注力することとし、①および②については完遂、③についてはその一部について実施し、一定程度の成果を得た。具体的な内容は以下の通りである。

- ・西之表市立図書館における『種子島研究』蔵書状況の調査（2023年9月6日～7日）＜現地調査者：出口、坂井、日高＞
- ・鹿児島県立図書館における『種子島研究』蔵書状況の調査（2023年9月15日～17日）＜現地調査者：日高＞
- ・種子島における『種子島研究』執筆者の聞き取り調査（1）（2023年12月2日～4日）＜現地調査者：出口、日高＞
- ・種子島における『種子島研究』執筆者の聞き取り調査（2）（2023年12月16日～18日）＜現地調査者：出口、日高＞
- ・種子島における『種子島研究』執筆者の聞き取り調査（3）（2024年2月3日～5日）＜現地調査者：出口、日高、鈴木、児玉〔以上2名は協力者〕※＞
- ※ 鈴木優作（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）
- ※ 児玉仁美（児玉製作所）

具体的なプロジェクトの成果

本年度の最大の成果は『種子島研究』総目次の作成と冊子化（主として上記の①および③に係る成果）である。これは、『種子島研究』の所在（すなわち図書館等における収蔵状況および冊子そのもののコンディションの把握）を踏まえ、後々『種子島研究』を活用する場合のポータルとなり得るものである。『種子島研究』全巻について総目次の作成し、これを冊子化（A4判70頁・80部）し、関係各所への配布も行った。

また、本年度の成果（①～③の全てに関わる内容）として研究ノートの執筆（『鹿児島大学 総合教育機構 紀要 第7号に掲載』）および種子島において実施した「鹿児島

の近現代」教育研究センター主催トークイベント「#鹿児島と女性」第3回「鹿児島の女性と教育」において、トークイベントのテーマと関連させてプロジェクトの成果報告を行った。

プロジェクトの成果物

<論文（研究ノート）>

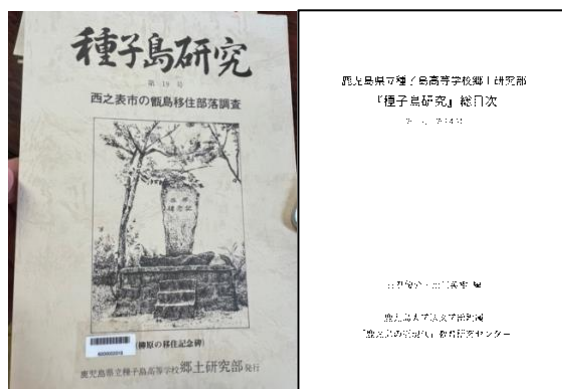
出口英樹・日高優介「地域における市井の研究成果の電子アーカイブ化とその教育的活用 ―鹿児島県立種子島高等学校における『種子島研究』を題材として―」鹿児島大学『総合教育機構 紀要』第7号、87-95頁、2024年3月。

<書籍等出版物>

日高優介・出口英樹 編『鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部「種子島研究」総目次 第1号-第24号』（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」研究教育センター）、2024年3月。

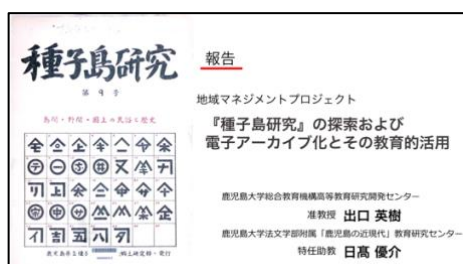
<社会貢献活動>

「鹿児島の近現代」研究教育センター主催トークイベント「#鹿児島と女性」第3回「鹿児島の女性と教育」（西之表市民会館、2024年3月3日開催）において出口および日高が報告。



（左）『種子島研究 第19号』（西之表市立図書館所蔵）

（右）『鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部『種子島研究』総目次書影



西之表市での報告会に用いたスライド

地域マネジメントプロジェクトの Relation 2023-2024

鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター
地域マネジメント担当 日高優介

令和5年度の地域マネジメントプロジェクトには13件の企画が採択された。前年度の地域マネジメントプロジェクトは募集初年ということもあり、法文学部の教員が公募の対象であったが、2年目となる本年度は募集の対象を全学へと拡大し、プロジェクトのメンバーに法文学部教員が加わることを応募の条件とした。その結果、教育学系の佐藤宏之教授、清水香准教授、総合教育学系の難波美芸講師、出口英樹准教授、理学系の中川亜紀治助教を申請者とする企画が採択され、法文学部の教員とともにプロジェクトが取り組まれた。ここに、「鹿児島の近現代」教育研究センターが法文学部附属の機関でありつつも、他学部と連携し学部横断的に鹿児島の諸課題に取り組むという特徴が示されたと考えられる。

そして、連携は学内に限られたものではない。澤田准教授の企画には他大学の研究者が参加し進められ、プロジェクトの幅の広がりを見てとれることができた。また、最も重要なことは、多くのプロジェクトが自治体や企業、学校や民間団体といった地域の様々な機関と連携し取り組まれたということがある。地域と大学との関係においては、調査対象者と調査者のような垂直的な関係が存在する場合がある。しかし、プロジェクトにおいては水平的な連携で取り組んだ様子を把握することができる。このような取り組みは、本学の「地域の大学」という特性をより強調するものである。

以上に示したように、学内外の連携による広がりを見ることができ、最後に本稿の題にあえて「Relation」という言葉を仕様したのかについて触れる。「Relation」には連携という繋がりを意味すること以外に「語る」という意味も持つ。プロジェクトでは地域の人々の語りに耳を傾けるものがあった。島唄の継承に係わる人々や地域産業の担い手の語り、子供の頃の川での思い出や60年以上前の高校の部活動についての思い出。インタビューやシンポジウムといった場で語られる様々な人々の様々な語りは多様な視点をもたらす。こうした人々の「声」を通じて現代の課題に取り組むことは、「地域の大学」である鹿児島大学が地域マネジメントプロジェクトをおこなう上で重要な姿勢であると考えられる。

まもなく、令和6年度の地域マネジメントプロジェクトの募集が開始される。令和5年度の13件のプロジェクトの知見が今後のプロジェクトに「Relation」されることを期待する。

令和6年5月

令和5年度地域マネジメント研究教育プロジェクト事業を終えて

鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター長
丹羽謙治

この度、「鹿児島の近現代」教育研究センターの地域マネジメント教育研究プロジェクトが、2年目の事業を無事終了しました。まずは無事に報告会開催にまで至ったご報告と、本事業に関わられた各位への感謝を申し上げます。

令和5年度は4年度と同じ数の申請がなされましたが、ひとつの申請について内容をふたつに分割していただきましたので、4年度よりも一つ多い13のプロジェクトが活動することになりました。そのうち、前年度からの内容が継続するものもあり、代表者は同じであるもののテーマを変えて新たに申請するものもあり、また純粹に新規の企画もあり、さまざまでした。上記の分割の要請以外は基本的に申請された内容、金額で実施していただきました。その成果は報告会での口頭発表、ポスター発表で報告され、本報告書にまとめられているとおりです。

かつて幕末の薩摩藩主島津斉彬は富国強兵を短時間に実現するために数多くの事業を展開させました。成功を収めたものもあり、失敗したものもあります。成功ばかりが取り沙汰されるのが世の常ですが、失敗を恐れずに数多くのプロジェクトを走らせたその胆力にこそ目を向けられるべきではないかと考えます。

本センターの事業のすべては鹿児島大学稲盛和夫基金によって運営されているのですが、かかる投資がすぐに目に見える成果に結びつかずとも、地域の多くの住民が地域の魅力を再発見し、地域への関心を持ち、地域を担っていく希望を持つ内容であれば10年後、20年後に芽を出すものと信じております。令和6年度はどのような企画が申請されるのか、今から楽しみでなりません。鹿児島大学の教員の皆様におかれては、大学が地域に貢献できるよい企画を立てていただき応募していただきますようお願い申し上げます次第です。

最後に弊センターは「鹿児島の近現代」にかかるさまざまな事象について研究を続け、地域の信頼を得られるべく、また、長く愛されるセンターにしていきたいと思いますので、引き続きよろしくご支援をよろしくお願い申し上げます。

「令和5年度 地域マネジメント教育研究プロジェクト報告書」

2024年5月25日発行

編集・発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30
鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 3F
TEL : 099-285-7532 FAX:099-285-7625
E-MAIL : kingendajim@leh.kagoshima-u.ac.jp

印刷・製本 斯文堂株式会社



令和5年度
地域マネジメント
教育研究プロジェクト
報告書

2023



鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター